



てくれる間は、続けんといかん」。

「コンビニができて、24時間アイスが買えるようになった。アイスクリンを取り扱ってくれよった駄菓子屋も減った。やけど、わんぱーくのおんちゃんが売って」



小学生の頃から30年以上通う常連さんもある。人気メニューは、焼きそば。
(高知市介良320-8 月曜定休)



私が初代です！

ペンギンのイラストは現在3代目。初代は土佐山田の画家に描いてもらった。絵のタッチは変わっても「赤の長靴」は変わらない。



昔の味を支える人

「おんちゃん、シロとピンクとソーダ」
「ありがと。順番どおりに入れていかね」
高知市棧橋の「わんぱーくこうち」には、週末になるとアイスクリンの店が立つ。おなじみの紅白のバラソルに、高知名物と書いた青い旗が揺れる。
近沢宣吉さん(75)は、元アイスクリン職人で、落合さんの父と同僚だった。「父が組合でアイスクリンを造りよってねえ。小さい時は、母が競輪場の横にあった子どもの国で売りよったのを食べに行った。一つ5円くらいやったろうか」。

こんな所にアイスクリン

床屋やパン屋など個人商店が並ぶ住宅街。その一角のこの町にもありそうな古いテントの店先には、自動販売機やメニューを書いたのぼり。その横に、ペンギンマークの冷凍庫が置かれている。部活帰りの中学生が自転車降りて、ポケットから百円玉を取り出し、「アイスクリンちょうだい」と声をかける。「今日も暑いねえ」と顔を出す店主の落合義文さん(48)。このアイスクリンの製造元である。

落合さんの父は「1-X-1」のコピーで有名な高知アイスクリーム商工業協同組合に所属するアイスクリン職人だった。昭和53年、45歳で独立し、工場を構え、アイスクリンの製造・卸の「南水洋冷菓」を興した。その3年後、アイスが売れない冬の収入源にと、焼きそば、お好み焼きの店「ペンギン」を高知市介良に開店した。

落合さんは高校に通いながら父を手伝い、店を任されるようになった。平成10年から父に代わって、アイスクリンの製造を始めた。「まさか自分がアイスをやるとは思わなかった」と苦笑い。週3日は朝3時に起き、4時には工場

でアイスクリンを造り、11時には店を開ける。



高知 アイスクリン 物語

特集

「らっしやいー！ 今日暑いわんぱーかんがねこれ食べんといかんがね」

シロとイチゴ味もあるぞね！

陽炎の揺れる国道で、駄菓子屋の店先で、お城下で、よさこい祭りで、至る所にバラソルの花が咲く——自動販売機やコンビニが普及した今でも、暑さが厳しい高知にはアイスクリンがよく似合う。

ここは黒潮町の海沿いの国道。朝9時から夕方4時まで四万十市の西山冷菓がお店を出している。おじいさんの代から家族で製造し、販売しているんだとか。